

昭和二十年三月十日 米軍B29爆撃機大編隊東京空襲。以後各地におよぶ。

昭和二十年八月六日 広島市に原子爆弾投下。一挙灰と化す。

昭和二十年八月十五日 終戦の大詔下る。我れに優秀な飛行機あらばと痛感するのみ。

## 満州飛行場大隊勤務とソ連抑留

栃木県 笹沼収作

私の徴兵検査は矢板の小学校の講堂で行われました。大正十一年二月二十一日、現矢板市長井一〇九で農業を営む父母の長男として生まれ、第二人の家庭でした。田圃一町歩、畑五反ですが、煙草栽培が主で、弟は無線機製造の軍需工場へ徴用され、末弟は学校へ通うという、当時としては典型的な農家でもあったでしょう。

検査の結果は予想していたとおり第一乙種合格・現

役入営ということになりました。昭和十八年二月十日、宇都宮の東部第三六部隊（歩兵第五九連隊の補充隊というか、留守部隊）へ入営、三月までは基礎教育を受けましたが、本隊の満州第二一九部隊へ行く身ですから、まあお客様待遇で、とりたてて厳しい教育は受けませんでした。その間には週一回程度の面会は許されましたし、留守宅は何とかやっていけたのであまり心配もせず、満州行きを待っていたのです。

三月になり、門司へ列車輸送されましたが、それほど嚴重な警戒でもありませんでした。満州の原隊からは赤羽少尉という中隊の教官が迎えに来られ、輸送指揮官を兼ねておられました。門司―釜山間の女界灘はそれほど荒れておらず、朝鮮を鉄道で北上、鮮満国境通過し満州のチチハル着。そこは第十四師団司令部等があり、私は歩兵第五九連隊へ入隊し、四月から正式な初年兵教育が開始されました。

留守隊のお客様扱いは一変し、教育は内務、練習共にだんだんと厳しさが増してきました。内務班は占参兵と一緒に初年兵は四人くらい、教育訓練より古兵の

戦友の面倒を見るのが大変です。私の場合は、最初から下士官を志願していた関係か、戦友がいろいろと教えてくれ、人間的にも尊敬できる優秀な方でした。内務班は内地より満州部隊の方が厳しいのですが、古参兵の戦友は、私的制裁がある時は私に用事を言いつけ外へ出してくれました。私の留守中に対抗ビンタなどが行われ、私が帰って来た時はもう制裁は終わっていました。それだけに私も一生懸命勉強しました。

一期の教育は四カ月間で終わって一等兵に進級、半年で上等兵に一選抜で進級できました。昭和十八年十二月、師団の下士官教育隊で教育を受けましたが、一連隊で六〇〜七〇人くらいだったと記憶しています。専門の教官が付き一般教育、私は重機関銃教育を更に受けたので随分厳しいものでした。一時は下士官志願をやめようと思ったこともありました。肉体的、技術的、精神的、心・技・体の教育で、特に下士官としての精神的教育は大変厳しいものだったのです。機関銃隊には馬がいるので、商家出の人は馬に触ったことも無いので苦労していましたが、私は農家出身ですから

その点は助かりました。

下士候教育が終了し、私は兵長になって連隊から南三里（十二キロ）ぐらいの所にある飛行場大隊へ転属を命ぜられました。飛行場大隊には飛行戦隊があり、その補給、通信、整備、補給警備などする部隊です。部隊名は第九十三飛行場大隊（羽第九一二九部隊）所在はチチハルでありました。

当時、南方から引き揚げて、満州第四八〇部隊とも言っていたと記憶しています。旧式の飛行機もあり、中型の爆撃機が来ていたこともありました。私の任務は飛行場の警備ですから、飛行機は勿論、飛行場の諸施設を守るわけで、地味な任務であります。当時は対ソ戦の兆候は無かったのですが、南方から引き揚げて来た飛行戦隊もいました。

昭和十九年になってから、飛行場大隊から一個小隊が編成され、興安嶺にできた飛行場へ警備のため派遣され、下士官に任官していたので分隊長として、約五十人の兵隊と共に任務につきました。そこは飛行場ではありましたが、設備もあまりできていない新しい飛

行場で、飛行機の発着もほとんどありません。我々警備の一個小隊は山の中におり警備をしていましたが、時々ソ連の偵察機が上空を飛ぶこともありましたが、格納庫は山をくり抜いて飛行機の格納庫としていたため、上空から見えぬようになってありました。我々小隊の装備は、重機関銃と小銃程度で無線はありましたが火砲はありませんでした。

私が勤務に就くころになると、私の母隊である第十四師団歩兵第五十九連隊は、南方のパラオ諸島へと出発していました。本隊にいた上官や戦友は、随分パラオで戦死しているので、私の第一回目の転機でありました。

昭和二十年八月、無線によりソ連の参戦を知りました。ソ連の偵察機から銃撃を受け、飛行場への引き込み線の貨車が動かなくなっていました。本隊とは無線で連絡がとれましたがソ連参戦といっても本隊からの命令はなく、若しソ連軍が来たら死守するつもりでおりました。壕を掘っているうちに、「本隊に合流すべし」の無線が入ったのは八月十日頃だと思えます。

貨車はやられてしまったので歩いて本隊に合流するのですが、昼は歩けず夜だけ歩く。一週間くらい歩きました。食糧は何とかしめました。空襲を受けるので木蔭にかくれましたが、現地人の抵抗はありませんでした。本隊に着いたら終戦になっていました。やっとたどり着いたら本隊は大変でした。敗戦からは本隊におりましたから、司令部から「飛行場大隊はチチハルの弾薬庫へ集合せよ」と命ぜられました。八月二十日過ぎだと記憶していますが軍命により自主的武装解除をしました。

その時はソ連兵はあまり見ませんでしたので日本軍の上官の命令で動きました。飛行場大隊、戦隊、補給無線、警備隊その他が集結したので相当の人数でした。ソ連の命令で動くようになったのは、約一カ月後でしたか、弾薬庫に一カ月間収容され、部隊ごとシベリアへ送られました。我々は何もしなかったから内地へ帰ると思っていました。が、汽車は北へ向かっていきます。無蓋貨車で座れる程度の広さで、食糧は満州にあったものを使い、初めは米、後に高粱とそれでも九

月頃までは何とかもっておりました。幸いなことに中隊の仲間は大體一緒での行動でした。

ネーベルスカヤの付近で、天幕生活に入りましたが、二〇人ぐらいが二段ベッド、ここでも同じ隊の者で労働が始まりました。原生林を開発伐採し、道路を造り、聚落を建設する。そこが完成すれば十キロ、二十キロと先に進み、奥地へ奥地へと開発していく。ソ連兵の監視が四、五人いるが、見張り程度で体罰はありませんでした。

しかし、ノルマは課せられ、出来高のパーセントにより食糧配分が異なりました。食糧は先ほど申しましたとおり米から高粱に、さらに粟になりました。量も少なくなり、量、質共に悪化し、ついに私は栄養失調となってしまいました。

我々の健康状態により第一、第二、第三群と分けられ、それにより作業内容が変わるのです。病気は凍傷類が多かったようです。防寒具はあっても零下三〇度くらいまでは作業をさせられました。作業は相変わらず、伐採、道路造り、聚落作りでしたが、第一群に対

しては食糧一二〇%、第二群は一〇〇%、第三群は八〇%、第四群は病院入りでした。作業量により食物の量が変わるのです。私は栄養失調となり作業も充分でないため第三群になってしまいました。これが、次の運命の転機です。

第三群になると今までの仲間とは別れ別れになってしまうので、それから後は抑留場所が転々と変わってしまいました。自殺や逃亡などの話はうわさで聞いていましたが、自分の所ではありませんでした。第三群は木造の兵舎で、そこに何百人か住むのです。作業も薪取りなどの軽作業が多いのですが、食糧が少なく粗末なので、栄養状態は良くなりませんでした。悪循環であったので結局復員まで第三群でありました。

兵舎では、軽作業であったので監視は他よりややゆるやかでした。四カ所に望楼の監視所があり、逃亡などを上から見張っていましたが、中での監視はありませんでした。共産主義教育はあったのですが、同調しないと帰れないとのこと故、一応それには従っていました。少なくともほとんどの人が同調するふりをしてい

たようでした。

日本人同士の間には密告はありませんでしたが、食糧の分配についての争いが、毎日、毎朝ありました。しかし口げんか程度で暴力沙汰は無かったです。作業所の出入り口には人数等を監視する兵隊も二、三人はいたから内部での争いは死傷におよぶものもないし、それだけの気力も体力も無かったです。それより、一日でも早く帰りたい。帰ることが遅れるようなことをする馬鹿な者もいなかったでしょう。

作業が終わり寝るまでの話題は食べ物の話がほとんどで、日本へ帰ったら、何を作って、何を食いたいということ。家郷や家族のことばかりでした。内地との交信を私は三回出しましたが、家に着いたのは一度あつたそうです。

ダモイの噂は誰もが待っていました。正式な発表が無いので、噂は噂として消えてしまい、また嘘か、との思いが常にありました。ソ連は我々をまた騙していると思いつつも、移動がある度に希望を持つのが当時の我々にとっては当然の心境でした。しかし、現

実は、移動すると、ダモイではなく次の作業場へ送られるので、ついにはいつも騙されているのだと思うようになってしまいました。

正式のダモイを言われたのは、抑留二年を過ぎてからだだったと思います。自分のいた第三群の兵舎の者全部、ナホトカへの移動命令があり、今度は帰れると思いましたが。前からナホトカからの帰国の話を聞いていたからです。

今までは今度も駄目、今度も駄目だったのに、昭和二十二年、無蓋車の列車で移動です。東へ、東へとバイカル湖を経由、列車の中で食事を取り、車中で寝る。ナホトカへ着くのに四、五日かかり、たしか七月でした。

ナホトカに着いても、残された者が何人かいました。赤の教育に反対したのか、再教育のためか、残置の教育員なのか判りませんが、我々第三群の者はほとんど一緒に、七月二十二日舞鶴に着きました。その時は、やっとなら日本に着いた、日本の土を踏んだ、これで死んでも良いと思いました。

家族へは知らせる方法がなかったので、家に帰ったら皆びっくりしたようでした。弟は内地勤務でしたので、嫁さんをもらっていました。私が若し重労働の第一群にいたら死んでいたかもしれません。

私は家に全然音信不通でしたから、生きているのか、死んでしまったのか、家族には判らなかつたのですが、父母は元気でいました。今までの食糧は粟を煮ただけ、粘り気は無く消化もしにくいひどい食事でした。しかし、帰ってから米のお粥、柔らかい飯と段々と体に慣らさせ、一カ月後には頬もふくれ、それから後は段々と体力もついてきて、ようやく正常な体にかえることができました。

シベリアでは栄養失調と水泡のできた凍傷程度で済んだので、二年後に結婚をし、農業をしながら現在に至っています。

とくに軍隊の思い出と言えば、下士官を志願し、下士官で優遇され、皆に良くしてもらいました。私も私の制裁をしたことが無かったことが良かったと思います。戦友会は飛行場大隊で、日本全国から集まり、栃

木県では私一人、群馬県でも一人で、出られません。交通は欠かしていません。